

令和6年度 学校評価報告書【国立市国立第五小学校】

学校教育目標		学びあう子 助けあう子 きたえあう子				重点目標	助けあう子		
学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価
					中間評価	最終評価			
学びあう子	自ら学び、自ら考え、共に高め合い正しく判断できる子を育てる。	基礎的・基本的な学力の定着を図るとともに、様々な事象から自ら課題を見付け出し、主体的に解決しようとする態度を育成する。	児童と共にめあてをつくり、見通しをもたせる。	児童・教員・保護者アンケートで「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」が80%以上。	B	A	アンケートの結果96%。学校が楽しいと感じる実績があり、温かな学校環境によって、学習の見通しをもたせることができています。	引き続き子供たちの声を大切にしていく。学びの過程も大切に多角的評価を実施する。授業後に丁寧な振り返りを行う。	児童、教員が楽しそうに過ごしている姿がよい。どの学級でも協働的な学習が行われていた。
			自分の考えを伝え合い、考えを深めたり再構築したりさせる。	児童・教員・保護者アンケートで「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」が80%以上。	B	B	児童アンケート95%、保護者アンケート87%、教員アンケート95%と協働的な学び、意欲的な学びが高評価であった。	保護者の意見を更に反映し、連携を深める。	「自分で考える」という指導が浸透し始めていることを感じる。
			地域や保護者と連携し、各教科の内容を充実させる。	教員・保護者アンケートで「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」が80%以上。	B	B	教員アンケートでは95%の肯定的評価を得たが、保護者アンケートは75%。保護者の中には、連携の取組についてもっと充実させてほしいという声がある。	学校の取り組みや連携活動について、保護者に向けたわかりやすい報告や広報活動を強化する。	ボランティアチャネルで学校に行く機会が増えたことで、学校の様子が分かるようになった。
助けあう子	思いやりがあり、かかわり合い働かせる心豊かな子を育てる。	他者との共生社会を生きていくために、さまざまな活動を通して、多様な生き方をし、他者と協働していくことのよさに気付かせる。	特別支援学級との交流を通して、多様性を認め合い、尊重し合う土台を築く。	児童・教員・保護者アンケートで「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」が90%以上。	B	B	特別支援学級との交流は子どもたちに良い影響を与えているものの、その成果が保護者に十分伝わっていない点が課題である。	学校での交流活動の様子を写真や動画、事例報告などで保護者に定期的に知らせ、子供たちの成長や変化を具体的に伝える。	様々な場面で交流があつてよい。
			フルインクルーシブ教育及び個別支援のための環境整備を進め、一人一人がその子らしくいられる環境づくりをする。	児童・教員・保護者アンケートで「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」が90%以上。	B	B	児童と教員のアンケート結果は、目標の90%を大きく上回った。保護者アンケートは78%と目標に届いておらず、保護者の理解や納得感にギャップがある。	子供への敬意が高いと感じている保護者に、いつでも気軽に来校できるような声かけを行い、学校の取組や活動内容を実際に見てもらう機会を設ける。	ボランティアチャネルを保護者だけでなく、地域にも広げるとよい。
			「特別の教科 道徳」を充実させ、命の教育や安全教育を推進する。	児童・教員・保護者アンケートで「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」が90%以上。	A	A	道徳の授業参観を通じて共に学び合う教員の姿勢が、授業の質向上や一貫した教育方針の共有に良い影響を与えた。	道徳教育の新たなアプローチや事例を共有する定期的な研修会を開催し、教員間で情報交換を活発にし、指導の質を向上させる。	道徳教育は長い目で見ていく必要があるので、引き続き学校全体で行ってほしい。
きたえあう子	心と体を鍛え、磨き合い健やかに伸びる子を育てる。	心身の発達について正しい知識の定着を図るとともに、自分自身の健康状態に関心をもち、より高めていこうとする態度を育成する。	パワーアップイベントや縄跳びキャンペーンを通して、基礎的な体力の向上に努めさせる。	児童・教員・保護者アンケートで「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」が80%以上。	A	A	短期集中型の縄跳びキャンペーンにより、子供たちの体力向上への意欲が高まり、楽しく取り組む姿が見られた。	全学年が楽しめるよう、活動内容にもう少しバリエーションを持たせ、各児童のレベルや興味に合わせたプログラムを検討する。	自由に遊べる公園がへつてきているので、学校で様々な機会をつくっていくとよい。
			体力テスト等を通して課題を把握し、その解消に向けた具体的な取組を行う。	体力テストのアンケートにおいて、運動に対する肯定的な評価80%以上。	B	B	体力テストの結果がデジタル化されたことで、保護者が子どもの健康状態を分かりやすく把握できるようになった。	体力テストの結果をもとに、各学年に合わせた具体的な運動プログラムや目標設定のアドバイスを実施することで、継続的な成長を促す。	体力テストをして終わり、ではなく継続的な運動が必要。
			保健指導（生活習慣・感染症予防・食育等）を充実させる。	保健・給食委員会のハンカチチェックでハンカチ所持率、各クラス80%以上。	C	C	所持率が80%を超えたクラスは、学級にとどまった。日々の指導が生かされておらず、手洗いや衛生習慣の定着が図られていない。	手洗いや衛生習慣の定着を図るために、定期的なチェックや、小さな達成をみんなで共有する仕組みを導入する。	家庭でできる指導は、家庭ですべき。

達成状況の指標 A:90%～100% B:80%～90% C:0%～80%